韓国における代案学校の理念からみた学校美術教育への示唆点に関する研究

金　香美*・福田隆眞

A Study on the Views on School Art Education in the Light of the Ideal of Alternative Schools in Korea

KIM Hyang Mi * and FUKUDA Takamasa

(Received September 30, 2005)

I　はじめに

今日、社会の急速な発展は我々に新しい価値観や行動の様式を要求している。これは政治、経済、社会など、あらゆる分野にわたっての現象であり、教育においても例外ではない。戦後、韓国の教育は一見、量的には多くの成長を成し遂げたかのようにみえるが、質的な面においてはかなり懐疑的な方である。これは、最近頻繁に論じられている「韓国における公教育の危機」という言葉からも明らかにされているもので、校内暴力、いじめ、教権の崩壊、入試に偏重された教育課程の運営、私教育費の増加、早期留学の増加などにつながる公教育の崩壊現象は、ますますその深刻さを増している。

このような憂いを背景に、韓国では1990年代の半ばごろから、代案学校が社会的な関心を集めてきている。従来の公教育に対する代案的な教育や学校形態を模索しようとする新しい試みが多様化されつつあるのである。代案教育は小学生から高校生までの年齢層を対象に、公教育制度としての学校教育を全面的、あるいは部分的に拒否し、一部の父母や教師、教育運動家らを中心に、民間の次元から多様な価値を追求する実践教育である。また、代案学校とはこうした実践が学校の形態で進められていることを意味する。現在、韓国で運営されている代案学校を類型別に分けてみると、自由学校型代案学校、生態学校型代案学校、再適応型代案学校、固有理念追求型代案学校などに区分できる。代案学校の最も大きな目的は、学生を尊重し、全人的カリキュラムを通して急変する時代に必要な人間を育成するところにある。これは美術教育の教育理念とも相応する部分である。

21世紀は「量の時代」から「質の時代」への転換、物質的な余裕よりは精神的・情緒的・文化的余裕へと価値意識を転換させる教育が求められる時代である。このような視点で、情緒教育の母体ともなる芸術教育、人間の感性を通して魂と精神を造形化する美術教育はイメージと感動に基づく感性的認識が伴われる教育である。そのため、韓国の美術科教育課程では、多様な美術活動を通して周辺の世界の美しさを感じ、それを享受できる審美的態度と想像力、創造性、批判的思考力を育てると同時に、美術文化を理解し、それを継承・発展させる能力を備え

＊韓国東国大学教育大学院兼任教授

た全人的人間を育成するのにその目的をおいている。

しかしながら、大学入試に偏重された教育の現実は教育課程が追求している本来の目的や趣旨を十分に充足させていない。学校現場における美術教科は入試の当落を左右するいわば「主要科目」から程遠いものになっているためである。

そこで本研究では、韓国の公教育としての学校美術教育における問題点について検討し、比較的、美術教育が活性化しつつある代案学校の事例を通してその解決方案を模索することを目的とした。

Ⅱ　韓国における美術科教育課程と美術科教育の問題点

現行の第７次教育課程では美術科教育の性格を、自分の思いや感じを視覚的表現を通して創造・発展させていく芸術の一領域として規定している。同時に、美術教育は当時代の文化を記録し、反映することによって、それを通して過去と現在を理解し、未来の文化の発展にも貢献する。しかし、美術教育が志向している本来の目的や内容とはうらはらに、制度的な面においても縮小一辺倒の傾向が著しいのが現実である。たとえば、従来の第７次教育課程では、中学校における美術科の授業時数が大幅に縮小され、また現行の第７次教育課程でも高等学校１学年における縮小がなされると同時に、２・３学年では選択科目に変更した。入試のための教育の結果、現在の授業時数だけでは効果的な評価やフィードバックはもちろん、正常な教科の運営までも期待できない状況となっている。

一方、美術に対する特別な関心や素質を持っている一部の学生たちは美術大学への進学のために、学校よりは美術塾や私設アトリエなどでの教育に頼っている場合がほとんどである。一般学校で正常に授業を受けただけでは美術大学への進学は不可能に近いからである。

大学教育においても問題がないのではない。美術に対する確固たる理論や価値観なしに制作のためのテクニックの伝授に偏重している場合が少なくないのである。

また、戦後の韓国における美術は誤導された純粋主義、観照主義などにながされ、社会的なコンテクストから遊離してきた。また、急激に移植された西欧のモダニティーの威力によって伝統の断絶が招かれ、その結果、美術は歴史的、社会的脈絡を喪失した。このような韓国の現代美術史の特殊性は21世紀を迎えた今日においても大きな限界として作用している[1)]。この点は一般美術界だけの問題ではなく、美術教育に対しても決して望ましくない影響を与ええてきたといっても過言ではないであろう。

別の側面でのもう一つの問題としては、青少年のための文化の不在をあげることができる。望ましい青少年文化を定着させうる教育内容や、彼らが生動する美術文化を享受できる美術活動プログラムが不十分なのである。そして、自分の生活を美しいものに営め、かつ改善していくような生活美術教育に関する認識も社会全般において足りない状況である。したがって、青少年たちが美術文化を満喫し、それを生活化することのできる具体的な美術活動プログラムの開発や、多くの活動の機会を与えようとする教育的配慮が切実である。美術科教育課程の全領域にわたって、学校と社会の関係に着眼し、青少年たちが日常生活のなかで健全な美的価値観をもちながら、自己表現を通して自我を実現させられる青少年文化の開発やその定着のための機能と役割を増やしていく必要がある。今後、青少年たちの文化的アイデンティティを回復させることのできる美術科教育課程の改善方案が多角的に検討されるべきであろう。

Ⅲ　韓国における代案学校の概念および現況

1　代案学校誕生の背景および概念

代案教育は、従来の普遍化された近代教育が、当初期待したものとはちがった根本的な問題を抱えていたということが認識されはじめてから台頭した。特に、産業のための労働力の養成および統制を主要機能として確立されてきた近代の公教育制度は、個々人の多様性を考慮するよりは、画一化された基準と内容、方法に頼ることによって教育的疎外や非人間化への可能性を内包してきたと。この点からみると、代案教育の台頭は、近代文明に対する根本的な反省としてのポスト・モダニズムの誕生と同じ脈絡線上にあるといえよう。つまり、それが究極の代案になりうるかはまだ明らかにされていないが、少なくとも従来の教育を根本的に再検討するきっかけとなったのは事実である。学校教育に対する多様な批判は常に存在してきたが、特に画一性や非人間化など、学校制度に対する根本的な問題意識は1970年代の半ばごろからいくつかの教育随想集が発行されたのを契機に、芽生えはじめた。これらの批判は代案的な学校の模索というよりは、従来の学校教育の改革と、そのための社会改革に関心を集中させるきっかけとなったにとどまっていた。以後、1990年代のはじめごろから、そうした様相に大きな変化があらわれた。政治地形の変化に伴って急進的な社会運動が退潮しながら、韓国社会の急激な変化や制度教育の構造的改革に対する展望も鈍化してしまった。反面、毎年100名以上の学生たちが入試や成績にかかわる問題で自殺し、多くの学生たちが家出や退学を決心するなど、学校教育の問題は日増しに深刻化してきている。生活水準の向上と外国文化の流入で、青少年たちの意識と文化は早い速度で変化しているにもかかわらず、学校教育は旧来の方式を踏襲することによって状況はより悪化してしまったのである。

1990年代の代案教育はこうした状況から登場することになる。そのごろから、学校の外および周辺では学校教育における問題の深刻性を感じた多様な小規模の団体らが、小さいけれど、入試のことで窒息しそうな青少年たちのためのプログラムを構想し、提供しはじめたのである。1986年から始められた「もう一つの文化」キャンプはその先駆をなした。休みや週末を利用した体験活動やキャンプの形で始まったこの活動は学生や父母たちの呼応によって拡大され、1995年、最初の連帯が結成されたことで代案教育は社会の持続的な関心事となった[2)]。

以後、代案学校に対する関心は拡散されながらも、実際にそこで何を教えているかについては具体的な論議がなされていなかった。したがって、ある人は、従来の学校教育とはその内容や形式においてまったくちがった教育現場として理解したり、あるいは、ただ望ましい教育を志向する学校のすべてを指す概念として受け入れたりもする。辞書では、「標準的な学校たちが提供する伝統的なもとは違った経験を追求する学生と父母たちのために特別な教授法とプログラム、活動、与件などを提供できるように考案された学校」と定義している[3)]。しかしここでの「伝統的なもとは違った経験」とは具体的に何を意味するかについては人によってさまざまな形で理解されうる。それは、従来の形式を維持しながらその内容だけをかえたものにもなりうるし、形式自体の変化に焦点をおいたものにも、あるいは形式や内容の両方をかえたものにもなりうるのである[4)]。

このように、代案教育の明確な概念の定義は難しいが、現実の教育の問題を心配する人たちの間では多様な代案教育が実践されている。すでに、韓国では11校の高等学校課程の代案学校が「特性化高等学校」として運営されているし、小学校と中学校課程の未認可代案学校も少な

くない。1999年６月には「代案学校協議会」が構成され、代案教育に関するする研究、代案学校の教師養成および研修、代案学校設立に対する支援および協議、その他、代案教育の発展のための共同事業が進められている。たとえば、ハンギョレ新聞社で運営しているハンギョレ文化センターには「代案学校教師準備課程」が開設されている。2001年３月には「ガンジ代案教育研究院」が設立し、代案学校の教師資格専門課程を運営している。この他にも「代案教育連帯」など、代案教育をネットワークで結ぶ作業も活発である[5)]。こうした代案教育の現実的な動きに注目して代案教育を定義してみると、代案教育は「1990年代以来、小学生から高等学生までの年齢層を対象に、公教育制度としての学校教育を全面的あるいは部分的に拒否しながら、一部の父母や教師、教育運動家を中心に、民間で多様な価値を追求する教育実践である[6)]」ということができる。

要するに、学校の成績だけで学生を評価する画一化した学校教育から脱皮し、新しい教育方法で子どもを育てようとする父母たちが増え、自然と人間が共存する学校、共同体の利益を優先する学校、社会性や創造力を育てる授業の拡散など、代案学校のブームはこうした社会的要求から始まった。また、代案学校に対する認識も、従来の「学校に適応できない学生らがいくところ」から「個性を求めて学生らが自ら選択するところ」に変化している。

2　代案学校の理念

代案教育において先駆的役割を果たしたドイツのシュタイナー（Rudorf Steiner、1861-1925）によって始められたヴァルドルフ教育学（Waldorfpadagogik）は、韓国には比較的遅く紹介された教育実践ではあるが、最も成功した代案教育論の一つとして評価され、世界的にも800校以上のヴァルドルフ学校が運営されていると報じられている。シュタイナーの思想は、世界を物質中心に理解しがちな現代社会の偏向的志向に対する問題提起から始まっている。彼は、現代の物質主義は「科学的」という幻想のなかでのみ生存しているため、その物質を貫通して作用する内面の構造を理解していないという。また現代の科学的主知主義は世界の一面だけを構成している想像力のなかに流れてしまい、その結果、幻想的知識になっているし、それにしたがって人間の思考行為を重要な活動とはみなしていない傾向があるという。ヴァルドルフ教育学ではそうした現代の科学的認識類型と主知主義的な教育傾向に反対し、人間の内的世界、つまり魂と精神の世界を通した真理の探究を強調することによって現代の非人間的教育現実を克服しようとしている。このような点で、ヴァルドルフ学校は代表的な代案学校として評価されているのである。

一般的に、代案教育が意図するところは、それが志向している価値や内容の基準によって多様である。しかし、代案教育が画一性と閉鎖性などといった学校教育の限界を克服するための視点から模索されたということには共通点があるといえよう。

代案教育の理念的志向をまとめてみると次のように区分できよう。

(1)　代案教育の特徴は学習者観においてあらわれる。

代案教育は児童・生徒を主体的で、自律的な存在、自らものを判断し、決定できる独立した人格体としてみる。したがって、学習者は自分が何を学び、何を選択するかを決定することができるし、学校の運営にも参加できる。

(2)　代案教育は共同体の価値を重視する。

代案教育は人間相互の協力と尊重、そして平等を強調する。共同生活を通してお互いを理解し、葛藤の際には譲り合いや妥協を通して摩擦を解決する体験ができる。

(3) 学習者観の変化は学習内容や方法の変化を随伴する。

伝統的な教育とはちがって、代案教育は決められた教育内容やそれによる効果的な教育方法があるとはみなさない。学生に対する確固たる信頼は、何をどのように学ぶべきかを学生たちに任せるのが真の教育を可能なものにするとみる。

(4) 代案教育は生命尊重思想あるいは生態主義に基づいている。

これは究極的に生命に対する価値を尊重するため、自然と人間はもちろん、人間と人間の間の平和的関係も同一な価値の範疇におく。

(5) 代案教育は労働を重視する。

労働や遊び、そして勉強が厳格に区分されないし、多くの代案学校では日常生活に必要なあらゆるものを労働によって調達したりもする。直接作る過程は多くのものを学び取る過程でありながら、それ自体、遊びであったり、社会的協同を体験できる過程であったりもする。

(6) 代案教育は小さな学校を志向する。

これは、教師と学生、学生と学生間の親密な人間関係のためである。小規模の学校は集団の同質性に基づき、追求する理念を自由に実現できる。大規模の集団が共同体を維持していくということは、構成員の多様性が抑圧されやすいのである。

(7) 代案教育は教育主体の回復のため、学生、教師、父母間の３者の協力を強調する。

(8) 代案学校は地域社会と緊密な関係を維持する。

教育が人生の過程と遊離されず、学生たちが幅広い経験を積むために、同時に学校が父母の参加のなかで運営されるためには当然要請されるものである。両者の理想的関係は、学校が地域社会の文化的中心地であり、地域社会は学習の無限の資源となるのである。

3 代案学校の類型

上記のような理念の多様さにしたがって、代案学校の形態もさまざまである。代案学校の内容上の特徴を考慮し、その類型を分類してみると次のとおりである。

(1) 自由学校型代案学校

イギリスのサマー・ヒール学校がその代表的な例である。従来の学校が学生たちを抑制し、教師中心の教育一辺倒であったことを批判し、学生たちの無限の潜在性や可能性に対する固い信念に基づいた教育を追求する学校である。

(2) 生態学校型代案学校

この類型の典型は1982年に設立されたイギリスの「小さな学校」ということができる。インド出身の生態主義者によって建てられたこの学校は学生たちを対象に、知識教育だけでなく、衣食住に関連した基本的な活動を教育内容にしている。

(3) 再適応学校型代案学校

学校に対する不適応学生を対象とする学校である。現在、韓国における「特性化高等学校」の一環として運営されている場合が多い。

(4) 固有理念追求型代案学校

上記の三つの類型は代案的に追求する教育目的が比較的一般的であるといえるが、この類型は独特な教育理念や方式に基づいた実践を進めている学校である。その代表的な事例が前述したシュタイナー学校である。この学校は人智学という哲学を体系化したシュタイナーの思想に基づいて設立されたものである。

以上のような分類を通して、最近韓国において拡散している代案教育が追求するところが何であるかを把握することができよう。

Ⅳ　代案学校における美術教育

一般的に、代案学校は公教育制度の場合より、美術教育の重要性をもっと強調している。代案学校の本来の目的が全人教育の育成にある以上、その理想を具現するのに最も適合するものの一つが美術教育であるためである。この点に着眼し、これからの一般学校の美術教育においても、入試偏重の教育に抑制さていた青少年たちの感受性、創造性、判断力、表現力の開発に重点をおかなければならないであろう。

公教育制度下の学校教育に示唆する、代案学校における美術教育の共通的な特徴については次のようにまとめることができる。

(1)　学生数が少なく、授業時間にも余裕があり、個別化した学習ができる。

(2)　学生中心の授業で、学生たちの自発的な活動による学習ができる。

(3)　開かれた教育ができ、教科書という型にはめられず、多様な材料を利用しての多様な内容を学習することができる。

(4)　過程中心の学習ができる。

実際に、現在韓国における多くの代案学校では美術教育の重要性を強調しながら、上記のような融通性のある美術教育の実践につとめている。この点に対し、各代案学校における美術教育の実践事例については本研究の後続研究として進めていく予定である。

Ⅴ　まとめ－美術教育への示唆点

急変する現代社会は従来のどの時代よりも創造力を備えた人間を求めている。また、未来の社会に必要なものは知識人だけでなく、思考しながら感じ、そして自律的に行動する全人的人間像である。したがって、今日の学校美術教育は時代が要求する人間像、文化的要求に応じて文化の主体として生きていける人間の姿に焦点をあわせて教育課程の編成を考慮する必要がある。その面で、自由な教育を尊重する代案学校の美術教育が学校教育に示唆するところは実に大きい。

たとえば、柔軟性に富んだ討論学習を通した美術教育、現場学習を通した美術教育、そして青少年たちの興味や関心に基づき、デジタル時代に相応する映像文化教育への拡大など、時代の変化に対する学校美術教育の課題は山積しているのである。

注

1）成完慶（2003）「何が危機で、機会なのか－21世紀の美術教育の展望のために」、2003年度美術教育者大会資料集、p. 8

2）林智宣（2005）「代案学校における美術教育に関する研究淑明女子大学校大学院修士論文、p.22

3）国語国文学会（2002）『 実用国語辞典 』、民衆書館

4）李鐘泰（2001）『代案教育と代案学校』、ミンドルレ、p.116

5）李鐘泰（2001）前掲書、pp. 118-119

6）姜大中（2002）『代案学校は学校ではない』、朴英律出版社、p.19

参考文献

・李相柱（1997）『未来のための韓国教育』、教育科学社
・鄭潤慶（2000）『シュタイナーの認知学とヴァルドルフ学校 』、明日を開く本